



ショートコメント

★★★

Data 2022-60

監督・脚本：キリル・セブレ
レンニコフ
原作：アレクセイ・サリニコ
フ『インフル病みのペ
トロフ家とその周囲』
出演：セミョーン・セルジン
／チュルパン・ハマー
トワ／ユリヤ・ペレシ
リド

インフル病みのペトロフ家

2021年／ロシア・フランス・スイス・ドイツ合作映画

配給：ムヴィオラ／146分

2022（令和4）年5月19日鑑賞

シネ・リーブル梅田

みどころ

2022年2月24日のウクライナ侵攻は衝撃だったが、以降、ロシアとプーチンの偉光と信用はガタ落ち。そんな状況下、タイミングよく(?)公開されたのが、この奇妙な邦題の本作だ。

“ある事件”で有罪とされ、軟禁下で脚本を書き、執行猶予期間中に闇に隠れて撮影したという本作のテーマはナニ？

権力者を恐れぬ鬼オキリル・セブレレンニコフが描く迷宮的ポートレートは、発熱？狂気？そんな本作は必見！そう思ったが、鑑賞後の感想は・・・？

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * ——

◆父親はユダヤ人の外科医、母親はウクライナ人のロシア語教師という、1969年生まれ
のキリル・セブレレンニコフ監督は、2017年、国からの演劇予算の不正流用を疑わ
れて詐欺罪で起訴され自宅軟禁された。しかし、兼ねてよりロシアのジョージア侵攻やク
リミア併合、LGBTへの抑圧を批判するなど、政権に批判的な姿勢を明らかにしていたた
め、この逮捕を不当な政治弾圧とみる向きもあり、演劇界・映画界からセブレレンニコフ
監督を支持する声が上がったそうだ。しかし、2020年6月10日に有罪判決が下され、
3年の保護観察、執行猶予付き3年の刑および罰金とされたから、これにてセブレレンニ
コフ監督の映画人としての活動もおしまい？いやいや、彼は、軟禁という不条理な状況下
で本作の脚本を書き、執行猶予期間中に闇に隠れて撮影をしたそうだからすごい。しかし
て、邦題を『インフル病みのペトロフ家』とする本作は、一体何の映画？

◆本作のストーリーは、公式ホームページによれば次のとおりだ。

2004年のロシア、エカテリンブルク。インフルエンザが流行している。ペトロフは高
熱こうなされ、妄想と現実の間を行ったり来たり。やがてその妄想は、まだ国がソヴィエ
トだった子供時代の記憶へと回帰し・・・。

このように簡潔そのものだが、これでは何の映画かがサッパリわからない。また、チラ

シでは、「ロシア社会へのブラックな風刺、型破りな芸術的感性、刺激的なアクション、行くあてのない悲しみ。ロシア演劇・映画界の鬼才キリル・セレブレンニコフ監督による今こそ見るべき強烈なインパクトに溢れた本作。」と書かれているが、それでも何の映画かサッパリわからない。

本作は、インフルエンザのため、咳をしながらバスに乗り込むペトロフ（セミョーン・セルジン）の姿から始まるが、さあ本作の展開は？こりゃ、一体何の映画？

◆スクリーン上に登場するのはトロリーバスだそうだが、そこでは車掌のおばさんの何とも権力的な声が目立つ。そんな中、ペトロフはさまざまな白日夢を見るが、そんな訳のわからないペトロフの頭の中に付き合っていくのは大変だ。他方、ペトロフの妻のペトロワ（チュルパン・ハマトワ）は殺人願望に囚われているらしく、包丁を持つ手が危なっかしい。おじさんや息子の首を切る妄想すら抱くようだから、この先一体どうなるの？

こんな訳のわからない夫や妻の妄想に付き合っていくのは大変だ。

◆本作についての新聞紙評は多く、そのほとんどが「カメラワークが素晴らしい」「驚くべき長回しの移動撮影が素晴らしい」と絶賛している。しかし、ハッキリ言って、薄暗いトーンで統一されたスクリーンは陰鬱だし、場所を移動し、時空をも超えているという長回しショットと言っても、私レベルの観客には“訳がわからない”ということに尽きる。

また、チラシには「発熱？狂気？」「驚くほど並外れたポスト・ソヴィエトのロシア像！」の文字が躍り、公式サイトの著名人のコメントでも、「夢幻と現実が混然と溶けあった時空間」「現実と虚構がグラデーションになった魔術的世界」等の文字が並ぶが、私にはその言葉自体がイマイチ？？？2時間26分もこんな映画を観るのは本当に大変！ホントに疲れた！

2022（令和4）年5月23日記